

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 東京天文台百年記念誌資料—その 3-18-②— 帝国大学年報の東京天文台記事 (大正 15、昭和元年度東京天文台年報)**

東京天文台百年記念誌資料について、アーカイブ室新聞に記事を書いている。前号まで明治時代の発見された帝国大学年報の東京天文台版について報告した。前号で大正 14 年度東京天文台年報を取り上げた。今回は大正 15 年度東京天文台年報を取り上げる。前号と同様、資料はゼロックスコピーで非常に判読しにくいので筆者が読み取り現代漢字、現代仮名遣いにして報告する。いくつかのデータの表があるがこれもできるだけ忠実に再現しておく。判読不能な場合にはそのように記し、さらに判読しやすいように適当に句読点を入れる。

大正 15、昭和元年度東京天文台年報

本台は天文学に関する事項を攻究し天象観測、暦書編製、時の測定報時及時計の検定に関する事務を掌り且大学院及理学部学生の実地授業及研究の用に供する所とす。

本台の位置は東京市麻布区飯倉町 3 丁目旧海軍観象台址に在り地積二千五百余坪を有す。現今採用する所の経緯度は、経度東 139 度 44 分 40.9 秒にして、緯度は北 35 度 39 分 17 秒とす。

本台の設置は明治 21 年 6 月 2 日、旧海軍観象台の天象部、内務省地理局観測課の天象部、理学部の旧天象台の合併に依りて成り、理学部の附属なりしが大正 10 年 11 月 22 日勅令第 450 号を以て官制を定め、東京帝国大学に付属せられ、是より先、明治 42 年 3 月東京府北多摩郡三鷹村の土地 9 万余坪を本台の敷地として建設中の処、工事の大半を竣成し、大正 13 年 9 月業務の大部を同所に移転せり。

この年度の報告記事のコピーはここままで、残りのコピーがない。以下は大正 14 年度の報告記事である。おそらく大差ないと思われるので、大正 14 年度のものをつけておく。

以下、大正 14 年度の関連事項：

本台、現今備付の天文機械中最も重要なるものは、第一、レフツソルドの子午儀 (筒口の直径 13.5「センチメートル」、焦点距離 217「センチメートル」、第二、ツロートン及シムスの赤道儀 (筒口 20.0、焦点距離 270)、第三、メルツの赤道儀 (筒口 16.2、焦点距離 245)、第四、グラスチャーの太陽写真儀 (玉の直径 12.8「センチメートル」、焦点距離 11.3「メートル」、第五、天体写真儀 (玉の直径 20.3「センチメートル」、焦点距離 108「センチメートル」、第六、テッハー分光太陽写真儀、第七、リーフラーの一等振り時計 2 台、第八、バー・ゴーチー一等子午環等なり

本台は逓信省の依頼に応じ全国郵便電信局及横浜、神戸、門司、大阪の四港務部並に東京帝国大学地震学教室へ電気信号法を以て毎日東京中央電信局を経て正午時を通報す。

本台は東京市の依頼に応じ、毎日正午の号砲発射の用に供する為の電気信号法を以て時刻を報知す。

本台は、通信省の依頼に応じ船橋及銚子無線局を経て主として航海中の船舶に無線電信を以て毎日午前 11 時及午後 9 時 0 分、1 分、2 分、3 分、及 4 分を報知し、每月中の報時修正値を翌月 15 日の官報を以て報告す、且、夏期中毎夜 11 時船橋無線電信局を通して学用報時を為す。

但し、本台の時辰儀と発信局の送信機とを陸上電線を以て連結し、本台依り直接に且自動的に発信す。

本台に於ては、各国天文台の例に依り毎年若干回本台研究事業の報告書を欧文にて編製し之を東京天文台年報と号し以て欧米各国天文台に寄贈し其の研究事業の報告書と交換す、又一般理学に関係ある数量を列記したる曆書の必要より計画中なりし理科年表を大正 14 年分より発行せり 是 本台の事業上もっとも緊要の事なりとす。

本台は、官制の定るところに依り曆を編製し神宮神部署より之を交付す、本年度に於ては、1 月に大正 15 年曆原稿の編製を了し、4 月に之を神宮神部署に交付し、次て大正 16 年曆の推算に着手せり

以降に表が 9 個存在するが、大正 14 年度と同じようにコピーの際順不同になっている。できるだけ順序を正して、別れているものは合わせて掲載しておく。

大正14・昭和元年度東京天文台年報甲号表										
一 教官、技術官及事務官表										
種別	教官又は技術官				事務官		族籍別			
	人員	俸給年額		人員	俸給年額	華族	士族	平民	計	
勅任奏	1等	台長			1	600			1	1
	合計				1	600			1	1
	3等	技師	1	3,100					1	1
			3						3	3
	4等	同	1	2,700				1		1
	5等	同	1	1,600					1	1
	6等	同	1	1,600				1		1
	7等	同	1	1,400				1		1
任	合計		5	10,400				3	2	5
			3						3	3
判任	5級俸	書記			1	1,020		1		1
	7級俸	同			1	780		1		1
判	計				2	1,800		2		2
	3級俸	技手	2	2,760				2		2
	4級俸	同	1	1,200					1	1
			1						1	1
	5級俸	同	3	3,060					3	3
			4					2	2	4
	6級俸	同	1						1	1
	7級俸	同	1	780				1		1

	8級俸	同	1	660				1	1
任		計	8	8,460			3	5	8
			6				2	4	6
		合計	8	8,460	2	1,800	5	5	10
			6				2	4	6
		総計	13	18,860	2	2,400	8	7	15
			9		1		2	7	9
備考 表中朱書きは兼任者にして東京帝国大学より兼任に係るなり									

二. 嘱託員表		
種別	人員	報酬年額
技術嘱託	1	1,320
総計	1	1,320

三. 雇員及傭人表				
種別			人員	月俸額
雇員	技術雇	月俸30円以上の者	7	359
		月俸30円未満の者		
	計		7	359
	事務雇	月俸30円以上の者	1	45
		月俸30円未満の者		
	計		1	45
	合計		8	404
	巡視		1	45
	職工		3	165
	小使		6	225
	合計		10	435
	総計		18	839

四. 休職員表		
階級	人員	休職俸給年額
勅任官		
奏任官		
判任官	1	
総計	1	
備考 表中朱書きは兼任者にして東京帝国大学より兼任に係るものなり		

出張人員及回数調		
要務別	人員	回数
公務儒(?)弁のため	4	52
編暦事務視察並に海洋气象台視察のため	1	1
京都大学視察のため	1	1
無線電信設備視察のため	1	1
事務打合せのため	2	2
合計	9	57

大正14・昭和元年度東京天文台年報 乙号表			
一. 土地表			
位 置	所要名	坪数	価格
東京市麻布区飯倉町3丁目17、18番地	東京天文台敷地	2,502	750,000
東京府北多摩郡三鷹村大字大沢	同	84,652	423,259
合 計		87,154	1,173,259

大正14・昭和元年度東京天文台年報 丙号表			
一. 経費表			
種 別			金額
歳出	經常部		
		校費	
		備品費	9,869
		図書及印刷費	2,257
		消耗品費	6,081
		通信運搬費	732
		各所修繕費	1,012
		内国旅費	1,463
		給与	6,338
		雇人給	6,553
		傭人料	6,481
		被服費	101
		雑費	1,604
		合計	46,139
	臨時部	東京天文台望遠鏡購入費	
		望遠鏡購入費	68,559
		東京帝国大学復旧諸費	
		設備費	30,000
	合計		98,559

次に建物の面積、価格の表があるが、これは腑に落ちない表であるがそのまま載せる。

種別	二. 建物表										建築費	価格
	木造		土造		煉瓦造		鉄筋コンクリート造		鉄造			
	2階	平屋	2階	平屋	2階	平屋	2階	平屋	2階	平屋		
事務所	18	685									82293	82293
実験室及工場		131									10,336	10,336
写真儀及分光儀室		66					7	7			43,149	43,149
諸観測室		29			8	8	13	86	1		139108	139108
		掘立 2										
時計庫		9									13622	13622
蓄電池室		4									822	822
倉庫			4		2			1			903	903
観測者休憩所 及職員仮宿舎	40	82									22041	22041
唧(?)筒室		5									1069	1069
門衛所及小使室		38									6236	6236
物置・便所・廊下		40									4,399	4,399
官舎		341									67,356	67,356
合計	58	1,432		4	8	10	20	96		1	391,334	391,334

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp